

文 國 大 子 女

第四百十二号

平成二十年一月発行

近世中期における儒書唐音音読論……………	湯 沢 質 幸 (一)
——平賀中南を中心として——	
『とはずがたり』信濃善光寺参詣記事について……………	須 田 亮 子 (二六)
上田秋成の句題和歌……………	李 婷 (四二)
——中国文学変容の一端——	
近代における天皇神話……………	高 橋 小百合 (七)
——その変化と〈皇軍〉のかかわり——	
京都近世開帳記録(三)……………	八 木 意知男 (二二)
彙 報……………	(三〇)

京 都 女 子 大 学 国 文 学 会

彙報

国文学会旅行企画

国文学会行事

大国三 松 浦 夕 明

○秋季公開講座（大学と共催）

十月三十日（火）

十四時四十五分～十六時三十分 於J二三四教室

講題 奈良絵本の世界

講師 慶應義塾大学教授 石川 透先生

○学会旅行

十一月十一日（日）

引率教員三名（中前・工藤・峯村）、学生二十六名で彦根方面を探訪しました。天候はいささか危ぶまれましたが、初めてのすべてが学生企画による学会旅行、有意義なものとなりました。なお、参加学生の感想を本号に掲載しています。併せて御覧下さい。

去る十一月十一日の午前十時過ぎ、私はJR彦根駅前のコンビニでビニール傘の値段のため息を吐いていた。国文学会旅行の朝は、生憎の雨。なぜ、よりにもよってこんな日に。晴れるものとはばかり思い込んでいたために、予想外の雨が学会旅行にどんな影響を及ぼすものか測りがたい。トラブルの原因になるのではないかと私はひとりで気を揉んでいた。

しかし、今さら悩んでも仕方がなかった。学会旅行参加者は次々とコンビニ前に集まって来て、そろそろ通行人の迷惑になりそうな様子であった。声をかけて集合してもらおうとしたが、私は大きな声を出すのが得意ではない。しかも、旅行気分ではしゃいでいる学生の注意を引くのはなかなか難しい。国文学会委員長として、私はこの旅行を仕切らなければならなかったのだが、早くも雲行きが怪しかった。

私とその日二度目のため息を吐きそうになったそのとき、「京女のみなさん！集まってください！」と、私より数段よく通る声があった。前国文学会委員長のT先輩がフォローしてくれたのであ

る。続いての昼食代の集金、注意事項の伝達時にも、T先輩と副委員長が私の手からさりげなく集金袋を取り上げ、私の言い忘れていたことを付け足してくれる完璧なフォロー役を務めてくれた。私が落ち着いた気分です。学会旅行開始の挨拶をすることができたのは、このような心強い味方がいたおかげに違いない。「今回は、国文学会初の学生プロデュースの学会旅行です。まだまだ至らない点もあると思いますが……」。

そう、今年の学会旅行は私たち学生が企画したものである。学会委員長の私、副委員長、T先輩、M先輩、二回生の学会委員一人、一回生の学会委員二人の総勢七人での試みだった。四月から準備を始めたのだが、これがなかなか大変だった。

まず、行き先に悩んだ。今回は日帰りということで、京都から近すぎず遠すぎず、さらに日帰りらしいリーズナブルな旅費に抑えられ、勉強にもなるような場所を見つけるのが難しい。先生方のご意見を伺ったり、学会費からの補助をお願いしたりして、ようやく築城四百年祭を迎えている彦根城に決定した。

それから、タイムスケジュールを組んだり、立ち寄る先や昼食の場所を決めたりしたが、インターネット上の情報には限りがある。移動の道順も、所要時間もよくわからない。ついに、一回生の二人に彦根城まで下見に行ってもらうことまでした。その甲斐

あって当日の道案内が得られたのでとても助かったが一つ誤算があった。三十人で歩くときは二人で歩くときよりも時間がかかって当然だということを見失っていたことである。まして雨の日であればなおさらだ。学会旅行当日は、タイムスケジュールと腕時計の針を見比べて冷や汗をかくことになった。なんとかなったのは、T先輩初め、学会旅行企画メンバーの臨機応変な対応と参加者のみなさまや先生方の寛容さのおかげだと、ありがたく思っている。

ところで、四回生の先輩は、教育実習に卒論にと多忙だったに違いない。ところが、一番的確な助言を与えてくださるのが有能な四回生の先輩方であるものだから、ついつい頼りにしてしまう。甘えすぎて迷惑をかけないように自戒しながらも、三回生以下の旅行企画メンバーは、結局一番大変なパンフレット製作をT先輩にお願ひしてしまった。その結果、できあがったパンフレットは大好評だった。凝った表紙には彦根のマスケットキャラクター「ひこにゃん」が載っている。内容は、彦根初代藩主「井伊直政公像」、彦根で盛んな俳句を紹介した「俳遊館」、白砂の庭園が美しい「宗安寺」、レトロな街並みの商店街「四番町スクエア」、江戸情緒あふれる街「キャッスルロード」、井伊直弼が青春時代を過ごした「埋木舎」など、立ち寄る先を詳しく解説したものである。これらは、実は旅行企画メンバー全員がこつこつと調べて、原稿にした。た

だし、レポートが締切日前にまず終わらないのと同じように、この原稿も仕上がったのは十一月だったが、短い期間で素晴らしいパンフレットを作ってくれたものだと思う。

また、この調べものを役に立てないのもったいないというわけ、私たち、旅行企画メンバーはガイドの真似事までした。舌足らずなガイドであったが、予想以上に真剣に耳を傾けていただいて、嬉しいような照れくさいような気がした。少しでも楽しんでいただけたのなら幸いである。

そして、心配だった雨も、お昼にはあがって晴れ間がのぞいた。いくつかハプニングはあったが、参加者には彦根を満喫していただいたようで、旅行時間の延長を願う声が出るほどだった。これも学会旅行企画メンバーのフォローのおかげだと思う。

最後になりましたが、頼りない学生を黙って見守ってくださいました中前先生、工藤先生、峯村先生、ありがとうございます。

国宝・彦根城四〇〇年祭巡り

大國一 秦 ひかる

今回秋季国文学会旅行の彦根城へ行くにあたっては、元々日本

史に興味があったし彦根藩主井伊家の中では特に直政・直弼に関心がありましたし、もうひとつは、京都から南へ行く事はあったけれど、北へ行く事は全くと言って良い程無かったので、色々なものをこの眼で確かめるという点では良い機会だと思いいました。

学会旅行では彦根城博物館で三体展示されていた甲冑「井伊の赤備え」、同じく博物館の井伊家伝来の名宝、宗安寺と直弼が青年時代を過ごした埋木舎が印象に残っています。井伊の赤備えは、元々武田家臣飯富虎昌らの「赤備え」にあやかっていたそうです。まだ具足が実用的だった頃は、複数同じ具足が藩主の身代わりを装う時等にあつたのではないかと私は考えます。幾ら装飾性が加わったとしても、赤色はより目立つのではないかと思っていました。資料を読んでみると、「朱具足を除けば、個性の主張は控えめで、頭形兜を主流とした比較的質素なつくり」だそうです。あまり兜を見る機会が無かったので、他にどんな種類があるのか気になっていたので今調べたりしています。

埋木舎で強く印象に残っているのは、庭に咲き乱れるたった一つの花と彼が詠んだ歌です。

世の中をよそに見つつもれ木の埋れてをらむ心なき身は
これ世を厭ふにもあらず。はた世を貪るときかよわき心し
おかげれば、望も願うこともあらず。ただうもれ木の籠り居

てなすべき業をなさまし。

とありました。もう表に出ないであろう我が身を詠んだ歌です。結局彼は兄の死により家督を継ぐこととなり、この場から出ていくこととなります。埋木舎から出る時、もしも彼がこの歌をもう一度見ていたなら、彼はどんな気持ちで見たのでしょうか。

彦根城天守閣に登れなかったのは残念だったけれど、今回の学会旅行に参加出来て、知らなかった事や、歴史的重要史料を見ることが出来たし、陶磁器にも新たに興味が湧いて勉強になった一日でした。

短い間でしたが、大変お世話になりました。有り難う御座いました。

学会旅行に参加して

短国二 東 田 真 衣

秋の気配が訪れ、寒さも本格的になった頃、秋季国文学会旅行の当日を迎えました。

「国宝・彦根城四〇〇年祭巡り」ということで、この日を楽しみにしていました。

彦根駅に到着すると天気は雨空でしたが、しばらく歩くと雨は上がり、秋らしい陽気に包まれました。道を行くと、昔ながらの街並みが広がる地域へとやって来ました。

ここは「四番町スクエア」という名所で、彦根の見所として親しまれているそうです。特徴的な洋風デザインのお店が建ち並び、それはもう目がひきつけられるほどの魅力で、どこか懐かしさを感じる独特な雰囲気をもつ街でした。

次に、浄土宗弘誓山天白院・宗安寺を訪れました。最初に目に入ったのが、あかもん夢観音像です。高さが一四メートルもあるそうで、とても印象強いものでした。お寺の中に入ると古い歴史を感じる奥深き造りで、貴重なものがたくさん展示してありました。庭園を見渡すと心が清らかな気持ちになりました。

昼食はキャスルロードにある「ほっこり屋」というお店を訪れました。ここでは比内地鶏を使用している親子丼をいただきました。学会旅行メンバーと皆で食事をして美味しく楽しくいただくことができました。

そしていよいよ国宝・彦根城域へとやって来ました。周辺は少し秋の葉が紅色に染まっていました。ここからは自由行動でしたので、私は一緒に学会旅行に参加した広井さんと真っ先に天守へと向かいました。お城まで辿り着くのに少し険しい階段を登りま

したが、自然に囲まれた中を散策することで、とても心地好い気分になりました。そして到着すると、まず私たちは城内を拝観することにしました。城内は頑丈で立派な木造に守られており、鉄砲狭間が所々にあり、ここに戦国の歴史的背景を感じました。城内から見下ろす景色は自然に満ち溢れ最高でした。

それから敷地内にあるお土産屋さんで「ひこにゃん」という兜を被った猫のキャラクターの飴を買ったり、たくさんのお土産を購入しました。

今回の学会旅行で、短大生活での思い出をまた一つ作る事ができました。普段ではあじわえない体験をたくさんさせてもらいました。本当に心から学会旅行に参加してよかったと思います。

秋の学会旅行 彦根城四百年祭を巡る

短大 一 今 西 佳 美

今回、初めての学会旅行で築城四百年祭で賑わう彦根の町を訪れました。

彦根駅に着くなり大雨に見舞われ雨の中の散策かと思いきや、キャッスルロードに差し掛かるころにはその雨もすっかり上がっ

ていました。

彦根の町は築城四百年祭ということもあり、日本だけでなく海外からの観光客もたくさん訪れていました。

キャッスルロードは江戸時代の町並みを再現したもので、現代的な感覚の中に歴史を感じさせる不思議な町並みです。土産物店や食事処などが軒を連ね、建物のほとんどは白壁に格子戸、いぶし瓦に統一されており、まるで江戸時代にタイムスリップしたかのような気分でした。

国宝の天守閣を持つ彦根城の周辺には彦根城博物館・玄宮園・埋木舎など多くの見所があります。彦根城は小高い山の上であり、敵が攻めにくいように意図的に踏み幅や高さを不規則に変えてある為かなり登りにくくなっていました。天守閣自体は思いの外小さかったものの、石垣の上にそびえ立つその姿は迫力にあふれ、姫路城・松本城・犬山城と共に国宝四城の一つとしての風格が感じられました。ほぼ垂直にかけられた階段を上りきって一望する城下町と琵琶湖の美しい景色は格別でした。

市制五十周年を記念して彦根藩の表御殿を再現して建てられた彦根城博物館には藩主井伊家に伝わる美術工芸品を数多く展示していました。なかでも「彦根屏風」は国宝に指定されており、近世初期風俗図の傑作と評されています。また、奥には茶室「天光

室」や庭園が復元されていたり、他にも能の舞台があったり、と見ごたえがありました。

彦根城の北東にある玄宮園は国の名勝に指定されている池泉回遊式庭園で、四代藩主井伊直興が延宝五年に中国湖南省の洞庭湖の「瀟湘八景」にならって造ったものです。緑が広がり琵琶湖の水を引き入れ琵琶湖に見立てた池のまわりを歩くと、見る角度によって様々な景色を味わうことが出来ます。池の真ん中に立つ「鳳翔台」は、当時藩主が客をもてなしたとされる由緒正しい茶室で、現在もお茶をいただくことが出来ますが、私たちは時間がなかったためお姫様気分を味わうことが出来ず残念でした。

駆け足で巡った彦根の町は井伊家三十五万石の城下町の面影を残し、江戸時代の趣きに満ちていて、私たちに歴史と文化を堪能させてくれました。

『女子大國文』投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。
- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められているフロッピーディスク一枚(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を明記すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括って記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。

六、(投稿先)

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇―一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の電子媒体による公開)

掲載された論文等は、電子媒体によっても公開する。

十一、(規程の改正)

- ① 本規程の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規程の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

編集後記

今号の査読・編集委員は次の方々です。

小椋嶺一・高見三郎・工藤哲夫・新聞一美

和田俊昭・田上 稔・坂本信道・山崎ゆみ

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果、五点の論文が掲載となりました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。(坂本)

女子大國文

第四百十二号

平成二十年一月十五日 印刷
平成二十年一月三十日 発行

〒六〇八八〇二 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼
発行者

京都女子大学国文学会

電話 〇五―五三―九〇七六

FAX 〇五―五三―九一二〇

振替 〇〇八〇―五―三一四

〒六〇八八〇六 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所

西村印刷株式会社

電話 〇五―四二―四一〇八代

FAX 〇五―四三―六二八二